# 平成19年度図書館情報学海外研修助成報告書

**松﨑博子**

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科

博士後期課程1年次

≪目次≫

I　渡航目的・訪問先・研修日程
II　研修の内容および成果
III　研修の記録
10 月 29 日（月）
10 月 30 日（火）
10 月 31 日（水）
11 月 1 日（木）
11 月 2 日（金）
11 月 3 日（土）
11 月 4 日（日）
11 月 5 日（月）

---

## I　渡航目的・訪問先・研修日程

### 「渡航目的」

卒業研究以来の研究対象であるジェシー・H・シェラに関するレコードを抱えるケース・ウェスタン・リザーブ大学（Case Western Reserve University）（アメリカオハイオ州クリーブランド）のアーカイブズを訪問する。

クリーブランド市のダウンタウンに位置するクリーブランド公共図書館（Cleveland Public Library）本館を訪問し、アメリカ有数の一流公共図書館を見学する。

### 「訪問先」

ケース・ウェスタン・リザーブ大学アーカイブズ（アメリカ オハイオ州クリーブランド）
（住所）1807 W 58th St, Cleveland, OH, USA
（電話）(216)905-8100

クリーブランド公共図書館本館（同上）
（住所）325 Superior Avenue, Cleveland, OH, USA
（電話）(216)623-2800

「研修日程」

| 現地 | 日本 | |
|---|---|---|
| | 2007/10/29 | 成田空港発 |
| 2007/10/29 | | ニューアーク空港着<br>ニューアーク空港発<br>クリーブランド・ホプキンス国際空港着<br>アルカザー（Alcazar）ホテル |
| 2007/10/30 | | Allen Memorial Medical Library（大学附属医学図書館）<br>アーカイブズ訪問 |
| 2007/10/31 | | アーカイブズ訪問<br>Adelbert College（大学内）<br>Allen Memorial Medical Library<br>Kelvin Smith Library（大学附属図書館）<br>アーカイブズ訪問 |
| 2007/11/01 | | アーカイブズ訪問<br>Western Reserve Historical Society（大学内博物館）<br>アーカイブズ訪問 |
| 2007/11/02 | | アーカイブズ訪問<br>Cleveland Museum of Art（大学内美術館）<br>アーカイブズ訪問<br>クリーブランド公共図書館訪問<br>クリーブランド市役所および市政図書館訪問 |
| 2007/11/03 | | クリーブランド公共図書館訪問<br>クリーブランド・タワー |
| 2007/11/04 | | クリーブランド・ホプキンス国際空港発<br>ニューアーク空港着<br>ニューアーク空港発 |
| | 2007/11/05 | 成田空港着 |

## II　研修の内容および成果

海外教育研修助成金を受け、2007年10月29日－11月5日の間アメリカ合衆国オハイオ州クリーブランド市へ行ってきた。クリーブランド市にあるケース・ウェスタン・リザーブ大学およびクリーブランド公共図書館を訪問することが目的だった。

訪問先であるケース・ウェスタン・リザーブ大学には、1904－85 年の間ライブラリー・スクールが設置されていた。わたしが卒業論文以来勉強している図書館学者ジェシー・H・シェラ（Jesse H. Shera; 1903-1982）が1951－70年の間それの学部長を務めていた。

今年2007年、わたしはシェラ研究を進める上で、シェラが率いたライブラリー・スクールについて知る必要があると判断し、「ケース・ウェスタン・リザーブ大学ライブラリースクールの歴史」について研究してきた。シェラ学部長時代とそれ以前を対比させつつ、その歴史を概観した。そのなかで、そもそもライブラリー・スクールの基盤がクリーブランド公共図書館のなかにあったことを文献から知り、おのずとクリーブランド公共図書館の歴史についても目を向けることとなった。わたしは、両者の関係に焦点を当てたこの研究成果を本年9月に日本図書館文化史研究会の個人発表で発表し、幸い好評を得た。

本研修の主たる目的は具体的には次のとおりであった。①2007 年に実施した「ウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクールの歴史」研究を一層深めるために現地を見学すること、②大学のアーカイブズが抱える、シェラおよびライブラリー・スクールに関するレコードを入手するため、アーカイブズの利用規約に従い、日本に持ち帰るレコードの選別作業を行なうことであった。

本研修でいずれの目的も達成した。①については、クリーブランド市を歩き、町の様子をこの目で見た。クリーブランド市民と接することでその雰囲気と実態を肌で感じることができた。想像以上に立派であったクリーブランド公共図書館に入館したとき感動に身震いがした。人生で初めて研究対象であるアメリカ公共図書館を見学することができた。②については、選別し入手したレコードを表にまとめたので11－12ページを参照されたい。

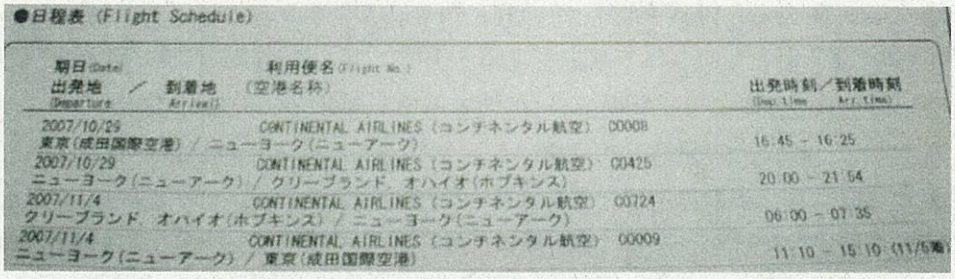
十分に勉強した上でその研究対象である現地を訪れたことにより、文献からは得られない情報を得ることができた。文献情報を踏まえクリーブランドで多くのことを見聞きし、感じ取った。文献でしか知らない世界に足を踏み入れるという感動も味わった。

最後に、今回の研修で何よりも深く心に刻みついたのは、ひとの親切であった。「III　研修の記録」で具体的に記すが、8日間信じ難いほど多くのひとに助けられ、親切にしていただいた。わたしの不十分な英語を理解しようと努めてくださったひとたち、見ず知らずの東洋人の旅行者に屈託のない笑顔を向けてくださったひとたち、本当にやさしいことばをかけてくださったひとたちがいた。わたしの人生のなかで、これほどの親切の連続に遭遇することがあるとは想像だにしていなかった。当然のことながら、ひとに対する自身の態度や姿勢を省みることになった。

この貴重な経験を持たせてくださったことに深く御礼申し上げる。

## III　研修の記録

海外教育研修助成という本研修の性質上、現地滞在期間中にわたしが体験したこと、そしてそれに対する感想を研修の記録として記すことが適切と判断した。また、画像を多用することも妥当と考え、現地で撮影した写真や収集した物品の画像をたくさん盛り込んだ。



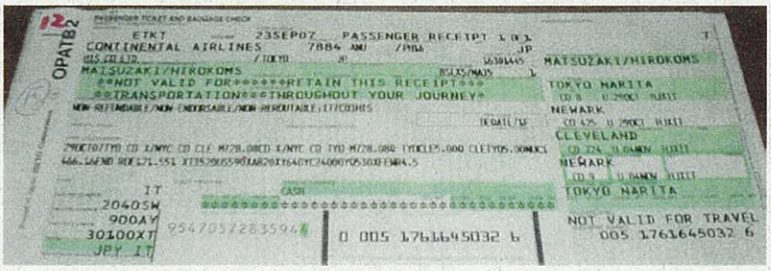
●日程表 (Flight Schedule)

| 期日 (Date) 出発地 (Departure) ／ 到着地 (Arrival) | 利用便名 (Flight No.) (空港名称) | 出発時刻／到着時刻 (Dep. time Arr. time) |
|---|---|---|
| 2007/10/29 東京(成田国際空港) ／ ニューヨーク(ニューアーク) | CONTINENTAL AIRLINES (コンチネンタル航空) CO008 | 16:45 - 16:25 |
| 2007/10/29 ニューヨーク(ニューアーク) ／ クリーブランド オハイオ(ホプキンス) | CONTINENTAL AIRLINES (コンチネンタル航空) CO425 | 20:00 - 21:54 |
| 2007/11/4 クリーブランド オハイオ(ホプキンス) ／ ニューヨーク(ニューアーク) | CONTINENTAL AIRLINES (コンチネンタル航空) CO724 | 06:00 - 07:35 |
| 2007/11/4 ニューヨーク(ニューアーク) ／ 東京(成田国際空港) | CONTINENTAL AIRLINES (コンチネンタル航空) CO009 | 11:10 - 15:10 (11/5着) |

**10 月 29 日（月）［日本時間］**

10:20　つくばセンター発の成田空港行きのバスに乗った。

成田空港に到着し、3 時間、本を読んでチェックインの時間を待った。




コンチネンタル航空 08 は定刻に出発し、偏西風に乗って定刻よりも早くニューアーク空港に到着した。約 11 時間の空の旅だった。

偏西風のことを教えてくださったのは、飛行機で偶然お隣の席になった西岡一光さんである。西岡さんは、Dayton（オハイオ州）在住である。約 11 時間の間いろいろなお話をしてくださり、本当に親切にしていただいた。感謝に堪えない。西岡さんは、11 月 3 日にサマー・タイムが終了することも教えてくださった。英語能力が不十分であるわたしが、ネイティブとの会話からサマー・タイムの終了を理解することはおそらく不可能であった。西岡さんのおかげで、無事に帰国することができた。

**10 月 29 日（月）［現地時間］**

15:30 ごろ　ニューアーク空港（ニュージャージー州）に到着した。

入国手続きを済ませ、ここで国内線に乗り換えた。セキュリティー・チェックを受けるために長蛇の列に並んだ。この間西岡さんはずっと一緒にいてくださり、流暢な英語を話して、何度もわたしを助けてくださった。

クリーブランド・ホプキンス国際空港行きのコンチネンタル航空 CO425 は、20:00 出発だったで、チェックインの 19:30 まで約 4 時間待った。西岡さんは Dayton 行きの飛行機に乗るので、西岡さんとわたしはニューアーク空港で別れなければならなかった。西岡さんはわたしが搭乗する C93 ゲート（C80 に変更）にわたしを連れて行ってくださった。その後西岡さんとわたしは一緒に飲み物を飲んだ。アメリカを旅行するのに必要な知識をたくさん授けてくださり、別れ際にはお金を貸してくださった。

コンチネンタル航空 425 にも無事に搭乗することができた。わたしの隣の席には新婚さんが座っていた。コンチネンタル航空のパイロットやキャビン・アテンダント数名も乗客として乗っていた。

クリーブランド・ホプキンス国際空港からクリーブランドの大学町に向かうときに地下鉄（RTA）に乗るべきかあるいはタクシーに乗るべきかについて、西岡さんの助言に従い、搭乗待合所で黒人の中年の女性に尋ねておいた。彼女が「地下鉄（RTA）に乗るべきだ」と言ったので、わたしは地下鉄に乗ることに決めていた。

22:00 ごろ　クリーブランド・ホプキンス国際空港に到着した。

地下鉄（RTA）の乗り場所はすぐに見つけることができた。しかし、切符の買い方が分からなかった。自動販売機があったが、料金表はないように思えた。改札口にはガラスの向こうに黒人の中年の女性が腰かけていた。University Circle 駅に行きたいということを訴えたが、彼女には分かってもらえなかった。彼女がわたしに話していることも聞き取ることができなかった。そうするうちに彼女はガラス張りの部屋から外に出てきて、電車の方を指差し、「行け！行け！」とわたしに叫んだ。わたしは発車しかけている電車に飛び乗った。

電車はワンマンだった。電車のなかにも切符の自動販売機が備え付けてあったが、やはり料金のしくみなどがよく分からなかった。乗客は全員黒人だった。男性がほとんどだった。車内には、拳銃持ち込み禁止の貼り紙などがあった。緊張感が漲っていた。

クリーブランド観光局で貰った地図

約 40 分間電車に揺られ、University Circle 駅に到着した。途中、クリーブランドのダウンタウン（Tower City Center 駅）を通過したが、深夜だったので、外の様子はよく分からなかった。大学町の University Circle 駅は無人駅だった。駅の階段を降りるとき、わたしの大きな荷物を黒人の若い男性が持って、下に降ろしてくれた。親切なひとだった。

駅の隣にバス・ロータリー（RTA）があった。深夜なのでひとは少なかった。宿泊する Alcazar ホテルに行くためには#32X というバスに乗る必要があった。しかし、バス・ロータリーのしくみがよく分からなかった。時刻表も見当たらない。ロータリーに停まっていたバスの運転手に#32X について尋ねた。そのとき黒人の中年の運転手は携帯電話で話し中だったが、話を中断して、#32X のバスが停まる位置をわたしに教えてくれた。

ほどなくして、#32X のバスがロータリーに来た。壮年の黒人の運転手と乗客たちが親しそうに言葉を交わしていた。乗客は全員黒人で、若者が多かった。運転手に Alcazar ホテルに行きたいことを伝え、料金を尋ねた。ここでも料金のしくみがよくわからなかった。運転手に「1 ドル札ではだめだ。硬貨だ。」と言われたが、このとき、わたしは硬貨を持ち合わせていなかった。Alcazar ホテル最寄りのバス停で、運転手はわたしに声をかけてくれ、ホテルまでの道を教えてくれた。運転手は親切で優しいひとだった。

バス停から Alcazar ホテルまでは 300 メートル程しか離れていなかったが、わたしは道に迷った。Alcazar ホテルに到着したときには時計の針は 0:00 を回っていた。

**10 月 30 日（火）**

308 号室から見たホテルの中庭

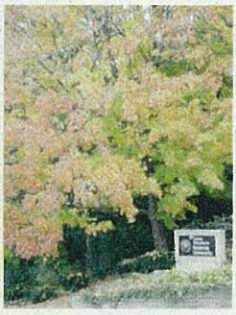
エレベータ前

ホテルの朝食

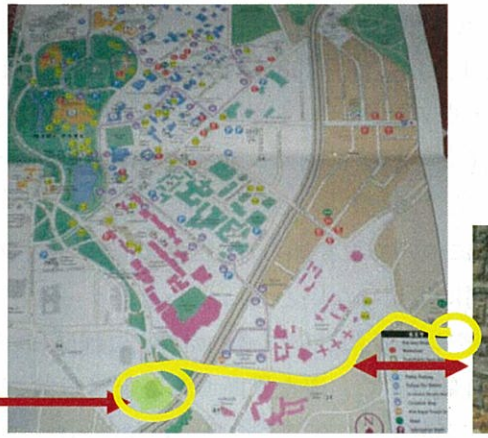
10:00 に開館するケース・ウェスタン・リザーブ大学アーカイブズを目指し、ホテルを出発して歩いた。地図を見つつ、人の流れについて行った。夜よりも朝の方が寒かった。

ホテルの玄関

Alcazar ホテル

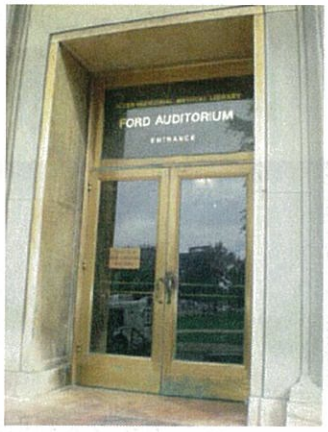


大学教員宿舎入口



アーカイブズ　　大学パンフレットの地図　　Cedar Avenue

Allen Memorial Medical Library を目指して歩いた。Allen Memorial Medical Library のなかにアーカイブズがあると勘違いしていたからである。



Allen Memorial Medical Library 裏門（左）と正門（右）
シャンデリアの後（2 階）が図書館

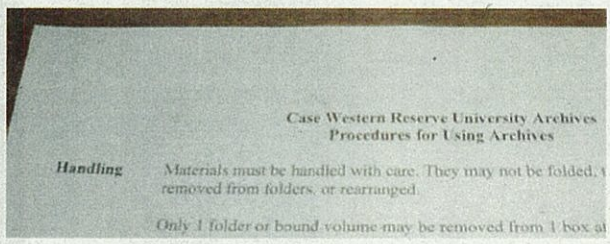
図書館の門の前で髪の長い細身の白人の女性が話しかけてくれた。彼女云わく、アーカイブズの住所は確かに Allen Memorial Medical Library の番地を指しているが、このビルのなかにアーカイブズはないらしかった。彼女はアーカイブズがどこにあるのか知らなかった。ビルのなかに招き入れられた。彼女は知人に出遭った。彼女はその知人に事情を説明し、わたしのことをそのひとに任せた。わたしは 2 階に連れて行かれた。そこには、Allen Memorial Medical Library の絢爛豪華な閲覧室と小さくて小ぎれいな事務室があった。わたしのために大学アーカイブズについて調べ、早速アーカイブズに電話をかけた老年の小柄な白人の女性は、この図書館の館長だったようだ。アーカイブズの位置を確認した館長は隣の部屋へ行き、部下 2 人に事情を話した。

2 人の女性が、わたしをアーカイブズのビルまで案内してくれた。15 分ほど歩いた。2 人とも中年の白人女性で、1 人は装備係（book binding）、もう 1 人はシステムの管理者だった。装備係の女性はケース・ウェスタン・リザーブ大学の図書館に勤めて長いが、システム管理者の女性はまだ日が浅く、わたしをアーカイブズに案内することで新人の彼女に大学構内を案内する意図もあったようだ。

2 人ともアーカイブズについてよく知らなかった。アーカイブズの職員を知らないし、図書館とアーカイブズの間に交流はないと言っていた。ケース・ウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクールやシェラについて尋ねたが、これについても知らないようだった。

クリーブランドは交通量が多く、道を横断することは危険だった。正直なところわたしはこの土地の信号・横断歩道のしくみがよく分からなかった。2 人の女性はわたしと一緒に横断歩道を渡り、アーカイブズが納まる Enterprise ビルの玄関まで連れて行ってくれた。2 人の女性が横断歩道を渡るのを見ていて、歩行者用の信号のしくみを理解することができた。歩行者用ボタンを押すと信号が変わり、黒地のディスプレーに人の形をした白色の電光が光る。まもなくして電光は点滅する。点滅が終わると、ディスプレーにはなにも表示されなくなる。このなにも表示されない状態が日本の信号でいう‘赤’を意味していた。自動車用の大きな信号機が紐にぶら下がっているのもわたしにとっては面白かった。

アーカイブズが納まるビル（正面）



Case Western Reserve University Archives
Procedures for Using Archives

Handling　Materials must be handled with care. They may not be folded, 
removed from folders, or rearranged.

Only 1 folder or bound volume may be removed from 1 box at

アーカイブズ利用規約

アーカイブズは、University Circle 駅前の Enterprise ビルの地下 1 階にあった。セキュリティが厳重だった。明るくてきれいな比較的小さな部屋だった。入り口付近に職員が作業するためのカウンターがあり、その奥に利用者がレコードを閲覧する大テーブル 2 台が置いてあった。隣にはレコードの保管室があり、そこは閲覧室の数倍の広さと見て取れたが、保管室への利用者の立ち入りは禁止されているのでよくは分からなかった。

アーカイブズ職員の Helen Conger と Jill Tatem と対面した。Helen さんとはすでに 1 年以上に亘りメールを交わしており、感謝の気持ちを込めてお土産を渡した。Jill さんにもお土産を渡した。‘Jill’という名前からわたしは彼女を男性と勘違いしていた。そのことをわたしの不十分な英語で本人に伝えたところ、Jill さんはムッとしていた。Helen さんがわたしの勘違いの理由を補足説明してくれた。それで Jill さんは機嫌を直したようだった。

Jill さん Helen さん

領収書

まずわたしはアーカイブズの利用規約を読まされ、その上でそれに署名した。その後で、複写料金が 1 ページ 25 ¢ であること、複写は 1 日 200 ページが上限であること、複写はかならず職員に依頼すること、そのためにわたしは白い細長い紙を挟んで該当部分を職員に示すこと、同時に 2 つのフォルダを開いてはいけないこと等々、細かなルールを確認した。

わたしの英語が拙いので、わたしも職員も互いの言うことを十分には理解できなかった。辛うじて最低限の会話ができた。聞き取っていたというよりは、勘を働かせていたと思う。相手の云わんとすることをどの程度正確に理解できていたかはわからない。

Helen さんは、わたしがメールで事前に要求していたレコードを含むボックス約 30 箱を用意してくれていた。初日（30 日）は、それらのうちの半分が 3 段のワゴンに乗っていた。夥しい数のレコードから合計 800 ページ以内（上限 200 ページ／1 日×4 日）に納まるように必要なレコードを選別しなければならなかった。この作業に必死に取り組んだので、アーカイブズでの時間は毎日あっという間に過ぎた。アーカイブズの開館時間中はそこでひたすら選別作業をし、夕方ホテルに戻ってから閲覧するレコードの順序と選択の方針を再検討した。

アーカイブズの開館時間は、10:00～12:00、13:00～16:45 だった。12:00～13:00 の昼休みには、アーカイブズが納まる Enterprise ビルの 2 階にある食堂へ行くようにと Helen さんに言われた。そこではスターバックスのコーヒーと、日替わりのスープ 2 種類、パック詰めされたサラダなどを売っていた。日替わりのスープはどれもあまり美味しくはなかったが一杯で満腹になった。スープと一緒にクラッカーを食べるという習慣を知った。このお店で働いているローライザさんはとても親切で優しいひとだった。鼻歌を歌ったり、面白いことを言ったりした。店を訪れる Enterprise ビルの多くの職員と親しそうに会話していた。

ローライザさん

日替わりスープを飲み終わると、わたしはEnterpriseビルの外へ跳び出した。これは毎日の習慣になった。30 日にはまだこの地域の感覚がまったくつかめていなかったので、Enterprise ビルの周りを歩き回った。公立の高校、私立の病院、職業訓練所などを外から見て、その後アーカイブズに戻った。

アーカイブズでの午後の作業を終えた。アーカイブズを出るときにHelenさんが地図を2つくれた。地図上のEnterpriseビルとAlcazarホテルに黄色の蛍光ペンで印をつけてくれた。「車に轢かれないように気をつけなさい。」と何度も念を押していた。

以下の表は、4日間をかけてアーカイブズで収集したレコードの一覧表である。内容について詳述することはしないが、目星をつけていたレコードのすべてを日本に持ち帰ることができた。今後の研究材料となる貴重な成果を得たことは間違いない。

**アーカイブズで収集したレコード**

| file | box | folder | | page |
|---|---|---|---|---|
| 27DA | 1 | 1 | Annual Reports, 1904/05-1951/52 | 12 |
| 27DA | 1 | 2 | Annual Reports, 1952/53-1960/61 | 18 |
| 27DB5 | 1 | 18 | Faculty Appointments and Promotions, 1953-1970 | 2 |
| 27DB5 | 2 | 2 | Library Science Visiting Committee. 1967-1970 | 4 |
| 27DD5 | 1 | 1 | Correspondence, 1922-1937 | 21 |
| 27DD5 | 1 | 2 | Correspondence, 1938-1939 | 17 |
| 27DD5 | 1 | 3 | Correspondence, 1940-1945 | 21 |
| 27DD5 | 1 | 4 | Correspondence, 1946-1948 | 13 |
| 27DD5 | 1 | 5 | Correspondence, 1949-1950 | 5 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 27DD5 | 7 : 12 | Jockel, C.B., 1940-1944 | 37 |
| 27DD5 | 8 : 1 | Keeney, P.O., 1936-1938 | 12 |
| 27DD5 | 9 : 2 | Milam, Carl H., 1931-1938 | 11 |
| 27DD5 | 10 : 3 | Ranganathan, S.R., 1949-1971 | 4 |
| 27DD5 | 22 : 7 | Amateur Radio Station. Licenses, 1922-1928 | 3 |
| 27DD5 | 22 : 9 | Berelson Controversy | 1 |
| 27DD5 | 22 : 12 | Biographical Data on Jesse Shera | 16 |
| 27DD5 | 26 : 3 | Census Library Project, 1940-1952 | 35 |
| 27DD5 | 26 : 4 | Central Information Division, 1943-1952 | 29 |
| 27DD5 | 26 : 6 | Chicago, 1938-1940 | 1 |
| 27DD5 | 26 : 8 | Chicago GLS. Correspondence, 1938-1949 | 34 |
| 27DD5 | 26 : 9 | Chicago GLS. Curriculum | 7 |
| 27DD5 | 29 : 9 | Confernce, Dorking. May, 1957 | 29 |
| 27DD5 | 34 : 3 | F.I.D. Washington D.C., 1965 | 7 |
| 27DD5 | 35 : 7 | Job Offers, 1939-1952 | 34 |
| 27DD5 | 35 : 8 | Kaula Medal, 1978-1979 | 8 |
| 27DD5 | 36 : 1 | Library of Congress, 1945-1952 | 45 |
| 27DD5 | 36 : 12 | Office of Strategic Services | 35 |
| 27DD5 | 37 : 13 | Oxford, Ohio. Shera's Farm | 6 |
| 27DD5 | 37 : 15 | President's Committee on Employment of the Handicapped, 1965 | 7 |
| 27ER | 1 : 2 | Cumulative Statistics, 1904-1983 | 9 |
| 27ER | 1 : 3 | Statistics, 1918-1960 | 2 |
| 27ER | 1 : 4 | Statistics, 1960-1980 | 6 |
| 27ER | 1 : 8 | Placement of Graduates. Statistics, 1923-1974 | 35 |
| 27ER | 1 : 9 | Placement of Graduates. Student Rosters, 1929-1969 | 21 |
| 27FP | 1 : 1 | Brochures. Archival Administration; Art and Music Librarianship; Law Librarianship; Library Management, Urban Librarianship, 1967-1986 | 4 |
| 27FP | 1 : 9 | Annual Report, 1967/68 "Health Sciences Librarianship" | 12 |
| 27FP | 1 : 22 | Objectives and Background, 1915-1965 | 4 |
| 27H | 1 : 1 | Clippings and Reprints, 1950-1985 | 10 |
| 27H | 1 : 4 | Scrapbook, 1905-1924 | 18 |

合計 595

**10 月 31 日（水）**

午前と午後にアーカイブを訪問してレコードの選別作業を進めた。

昼休みには、大学構内を歩いて見学した。

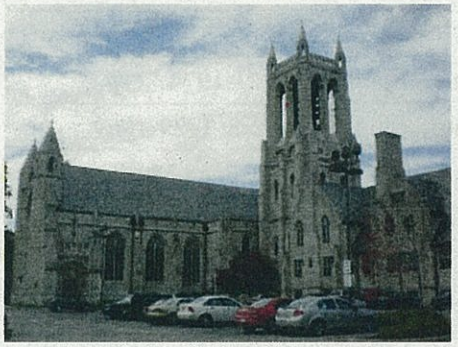
Adelbert College と教会

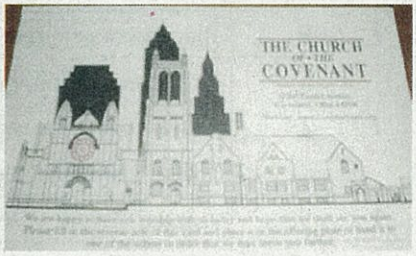
Adelbert College は、ウェスタン・リザーブ大学の基となったカレッジの 1 つである。

引っ越しを繰り返すことになるライブラリー・スクールが最初に納まったのがこの建物だった。『ケース・ウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクール 75 年史』[1]のなかに、ライブラリー・スクールがこの建物に納まっていた当時は、施設設備が整っていなかったと記述されているが、現在は内装も見事なものになっていた。

授業と授業の間には芝生の上の小道を大勢の学生が一列になって歩く。地域住民の歩く姿も見られた。歩く学生を見ていて、白人の割合が高いように思った。東洋人も一定数いた。雰囲気は普通で、荒んでいるようにも、とりわけ楽しそうにも見えなかった。

Adelbert College の横に立派な教会があった。大学構内には、いくつもの教会があった。それらは往々にしてカレッジの傍に位置していることに気づいた。






Covenant 教会

Covenant 教会の近くにはウーマンズ・カレッジの記念碑があった。Covenant 教会に入ってみた。誰もいなかった。なかは薄暗く、ステンドグラスから光が差し込んでいた。

---

[1] Cramer, C. H. The School of Library Science at Case Western Reserve University: Seventy-five Years, 1904 - 1979. School of Library Science, Case Western Reserve University, 1979.

クリーブランド大学病院

大学病院循環送迎バス

大学構内にある病院関連施設の規模は非常に大きかった。大学の敷地内に占める割合も比較的大きかった。クリーブランド大学病院（University Hospitals of Cleveland）の隣に乳児・子ども病院（Rainbow Babies & Childrens Hospital）があった。青色の大学病院循環送迎バスが大学町の中を走り回っていた。バスの数および運行数はきわめて多かった。道を歩くとき視界には常に青色のバスがあったといっても過言ではない。大学構内の道端で休憩を取る医療関係者の姿も目にした。

それらの病院に隣に、医学部と歯科学部、看護学部があった。そしてヘルス・サイエンス図書館、前日訪れた Allen Memorial Medical Library など大規模な医学図書館があった。アーカイブズまで案内してくれた Allen Memorial Medical Library の装備係の女性が、「大学附属図書館のなかで医学図書館の数が多い」と話していた。

法学部

クリーブランド音楽研究科

クリーブランド芸術研究科

駅に程近い病院関連施設の敷地、そして大きな公園、学生寮の地区に四方を囲まれるようにして、学部・研究科が置かれていた。創設に寄与した人物の名前を関している建物も少なからずあった。歴史を感じさせる建物や近代的な建物、芸術的な建物があった。

学部・研究科の立派な建物を見ながら思ったことは、ケース・ウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクールが全米において比較的早くに導入した複合学位システム（dual master degree）のことである。ライブラリー・スクールとともにこれに取り組んだのは、音楽、ヘルス・サイエンス、法学、芸術、ソーシャルワーク等であった。これらはすべてケース・ウェスタン・リザーブ大学が抱える学部あるいは研究科だった。サブジェクト・ライブラリアンの養成という理念・目標はもちろんのことだが、他方には他学部に在籍する学生にライブラリー・スクールにも籍を置いてほしいという戦略でもあったのだろう。

学内を学内無料循環バスが運行していた。Circle Link という名前だった。わたしのような旅行者は非常に珍しいようで、もっぱら大学構内を移動する学生たちが利用していた。おそらく学部生であろう学生たちは数人でバスに乗り込み楽しそうにしていた。バスの運転手は数名いたが全員黒人の中年の男性だった。乗車する学生たちとかれらは顔見知りのようで、お互い声を掛け合っていた。

Circle Link の運行回数は、大学病院の無料循環バスと比べれば非常に少なかった。大学の敷地は決して狭くはない。'こじんまりとした'大学という形容は相応しくないが、筑波大学と比べればその敷地面積は相当に小さかった。大学の端から端までを歩くことも可能だったと思われる。それでも Circle Link があったおかげで、わたしはそれに乗って効率よく大学構内を巡ることができた。

Circle Link **バス停のサイン**

Circle Link **バス内**

大学附属図書館本館である Kelvin Smith Library を見学した。

Kelvin Smith Library（**正面**）

**定期刊行物書架**

*Library Quarterly*

Kelvin Smith Library は円柱を持つギリシャ風建築の 3 階建てだった。建物の中心は吹き抜けになっており、そこには大きな螺旋階段があった。1 階中央にメインカウンターがあり、数人の図書館員が働いていた。1 階正面の奥に定期刊行物の書架が並んでいた。蓋つきのラックなどではなく、普通の書棚に定期刊行物が横に積み重ねられていた。ファンシーな雑誌もあり、それらは表紙を見せるようにして隅に置かれていた。2 階と 3 階の一部はガラス張りの部屋になっており、設立に寄与した人物の名前を冠していた。閲覧用テーブル（自習机のように見えた）がたくさん据えられていた。1 階の席の半分は勉強する学生で占められていた。2 階、3 階の席はほとんど空いていた。

2 階の目に付くところに図書館員の事務室・作業部屋があった。ほかの部屋と同様ガラス張りであった。そこはセキュリティが厳重であった。

Thwing Center

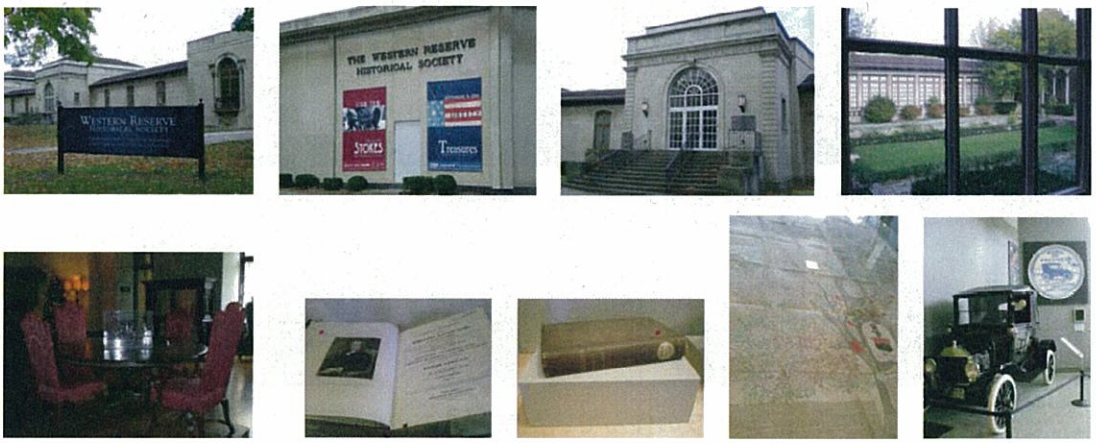
Kelvin Smith Library の隣に Thwing Center があった。増築を繰り返しているのが見て取れた。Thwing とは、19-20 世紀に学長を務めた人物の名前である。Thwing はライブラリー・スクールの創設時の学長であり、プロフェッショナル・スクールの可能性を認識していた人物であった。

Kelvin Smith Library および Thwing Center の隣にはサッカー場があった。それらの間にある石造りの小道には落書きがされていた。サッカーをしているひとはいなかった。小道をぽつぽつ学生が歩いていた。

**11 月 1 日（木）**

アーカイブズで午前・午後とレコードの選別作業を行った。

昼は、ウェスタン・リザーブ歴史学会の博物館に出かけた。ウェスタン・リザーブ歴史学会は長い歴史を持っており、シェラもこれに言及している。




ウェスタン・リザーブ歴史学会（博物館）

博物館のなかは 2 つに分かれていた。1 つは歴史博物館、いま 1 つはクロフォード自動車、航空機博物館である。それから別の翼にウェスタン・リザーブ歴史学会の図書館があった。博物館、図書館のいずれも有料だった。ミュージアムショップもあった。ミュージアムショップではクリーブランドの歴史に関する本が数多く販売されていた。

教員に引率される小学生がたくさん見学に来ていた。子どもたちの目当てはクロフォード自動車のようだった。館内には数名の職員と学芸員が配置されており接客に当たっていた。職員の老年の白人男性は、写真で見たライブラリー・スクールの生みの親にしてクリーブランド公共図書館長 William Brett と雰囲気がよく似ていた。入場券がミュージアムショ

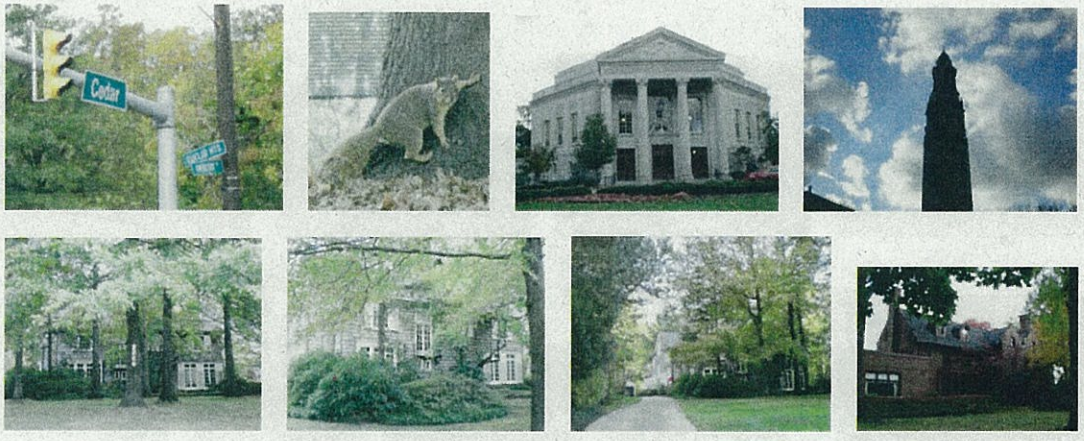
ップで販売されていることを教えてくれた。わりと親切なひとだった。ミュージアムショップの店員の若い白人女性はより一層感じの良い親切なひとだった。

入場券の購入を証明する、襟につける小さな固い紙を手に歴史博物館に入場しようとしたとき、学芸員である白人の中年女性が声を掛けてきた。「一緒に博物館を回って、展示品を説明してあげる」というようなことを言っている。「結構です。なぜならば、わたしの英語能力が十分でないのでおそらくご説明を理解できないからです。」というようなことを返した。すると彼女は、きりっとした顔をして「そんなことありません。わたしはあなたの英語を理解できましたから。」というようなことを言ってくれた。自分の英語能力に自信の持てないわたしは彼女のことばが本当にうれしかった。

歴史博物館のなかで大学の授業が行われていた。若い白人の女性の教員が大きなスクリーンにプロジェクタを向け、ポインタを使いながら講義していた。学部の学生たちは、披露宴会場のような華やかな室内で、丸テーブルに腰かけて、肘を突いたりしながら教員の話に耳を傾けていた。

このときの特別展示は、クリーブランドの施政に尽力した兄弟に関するものだった。そこでは、多くの学外の人が熱心に展示を見ていた。

アーカイブズで作業を終えて後、レコードの選別作業中に見つけたシェラの住所を手がかりにシェラが暮らした家を歩いて探した。運よくシェラの家を見つけることができた。




**シェラの住んでいた家とその付近**

シェラは大学街を見下ろす高台（Overlook 通り 2863）に住んでいた。わたしの滞在したホテルからそれほど離れてはいなかった。閑静な住宅街だった。シェラの住んでいた家は涼やかな雰囲気に包まれていた。推測に過ぎないが、きっと暮らし心地は良かっただろう。隣には大学の学生宿舎（寮ではない）が建っていた。シェラが暮らした場所に自分が立っていると思うと感慨深かった。

ちょうどそこを通りがかった物腰の柔らかな散歩途中の白人の中年の男性にシェラのことを尋ねてみたが、知らないと言われた。シェラは25年前に亡くなっている。シェラ夫人は、シェラの死後再婚した。シェラの息子と娘が健在だろうが、ここに住んでいる可能性は低かった。英語能力が不十分なので、家の戸を叩く勇気はなかった。

**11 月 2 日（金）**

アーカイブズ訪問の最終日。午前の開館時間と午後の初めにアーカイブズで作業を行なった。別れ際に Helen さんと Jill さんがわたしにお土産（大学のグッズ…ペン、付箋、栞、ナップサック）をくれた。予期していなかったのでうれしかった。

Enterprise ビルでわたしに親切にしてくださった方がもう 1 人いた。警備員の Georgette Underwood さんである。朝と昼と夕方の 4 回、ビルの玄関で顔を合わせた。Georgette さんはわたしに対して常に笑顔と優しい声で応じてくれたので、安心してそこを通ることができた。最終日にメールアドレスを交換したので、帰国後も連絡を取ることができた。

Georgette さん

昼は、大学内にあるアメリカ有数の美術館、クリーブランド美術館に行った。クリーブランド美術館は、公園内にあるのだが、それはクリーブランド芸術研究科の向いでもあった。美術館は現在バリアフリーに対応するために大改修中であり、貴重なコレクション 4 万点うちのほとんどは世界を巡っているとのことだった。美術館に残されている少数の作品を鑑賞した。

**クリーブランド美術館**

わたしはなかに入らなかったが、大学内には植物園や自然史博物館、専属のオーケストラを持つ立派な音楽堂などもあった。それぞれ関係する学部・研究科の近くに対外的な施設が数多く設置されているのを見て、それは地域社会・学外者に対する大学側の積極的なアピールをしているというよりもむしろ、そもそも大学と地域社会が根っ子でつながっているからではないかという印象をわたしは受けた。

美術館を見学した後、わたしは大学を去り、University Circle 駅から地下鉄（RTA）に乗って、クリーブランド公共図書館があるクリーブランド市のダウンタウンに向かった。

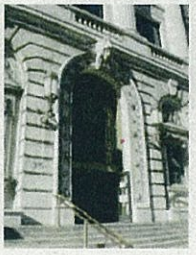
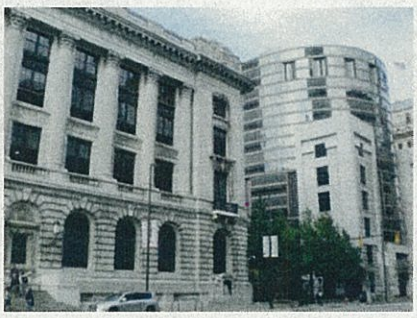
このときようやく地下鉄の切符の購入方法が分かった。自動販売機でお釣りが出ないことには驚き、閉口した。（しかし、わたしは初日に乗車料金を支払っていないので、この日に払いすぎたことでいくらか帳尻が合った。）

この日も地下鉄の乗客のほとんどが黒人の男性だった。白人の若い男性も 1 人乗っていたが、彼に対してなにか違和感のようなものを感じないでもなかった。乗客である黒人の男性たちの年齢層には幅があった。車内で若者たちが大声を上げて（おそらく）ふざけていた。中年の男性は騒いでいる若者たちを振り返り、厳しい眼差しを向けていた。

上にも記したように、地下鉄・バス（いずれも RTA）といった交通機関の乗客は黒人だった。わたしが道を普通に歩いているとき、バスの黒人の運転手も、バスの到着を待つ黒人たちの乗客たちも、見ず知らずの外国人であるわたしに「ハーイ（Hi）」と笑顔で声を掛けてくれた。少なからずそういうひとがいた。見るからに旅行者である東洋人（わたし）は彼らにとって物珍しかったのかもしれないが、彼らの表情にわたしを嘲る様子はなく、温かい笑顔だった。すこし恥ずかしいような気もしたが経験のないことでうれしかった。

しかし、それでも地下鉄の車内では相変わらず胸が悪くなるほどの緊張感を感じ取った。自分の身に迫るものではないが危険を感じた。帰国後、西岡さんが教えてくださったことには、現在、クリーブランドは殺人などの凶悪犯罪が全米で 5 位になっているそうである。無事に帰国することができたことは運がよかった。

クリーブランド公共図書館本館は、Tower City Center 駅（ダウンタウンの中心）から 300 メートル程度の距離に位置していた。それは、想像以上に立派な外観を持つ建物であった。

**クリーブランド公共図書館本館**

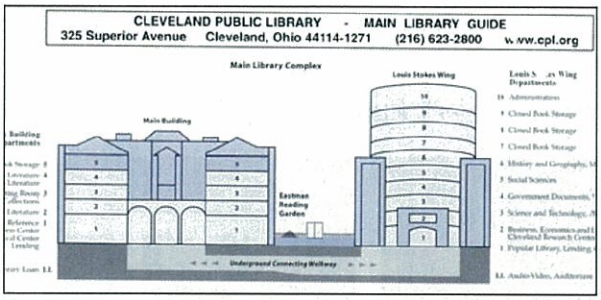
上の写真の左側の建物が本館（1925 年）で、右側の楕円形の建物が 1997 年に完成した新館である。本館はクラッシックの絢爛豪華な建物だった。一方、新館は近代的なビルで、いずれも相当の金が投じられていることは明らかだった。そのことからクリーブランド公共図書館がこの地域の人びとにどう位置づけられているか窺い知ることができた。本館と新館の間には地下 1 階に連絡通路がある。そして、地上における本館と新館の間、すなわち連絡通路の真上に Eastman Reading Garden がある。'Eastman'はライブラリアン Linda Eastman に因んでいる。彼女は前出の William Brett の後を継いで 20 世紀前半のクリーブランド公共図書館を盛り立てた傑出した人物であった。この庭も非常に立派なもので、金が

かかっているのがよく分かった。寒さのせいか庭に人の姿はなかったが、とても雰囲気のよい場所だった。

本館（東側）

本館と新館に挟まれる Eastman Reading Garden

新館（西側）



クリーブランド公共図書館のパンフレット

新館の北側（裏門）には、ドライブ・スルーの窓（lancet）があった。実際、利用している白人の中年女性がいた。彼女は車から降りて、借り出した本を返却しているようだった。

クリーブランド公共図書館新館の北側にあるドライブ・スルー

クリーブランド公共図書館の西隣には、図書館とよく似た建築様式の連邦裁判所・郵便局がある。クリーブランド市で一番の通り Euclid Avenue を挟んで向いには高級ホテルハイアットが建っていた。北隣には教育委員会が収まる大きな建物があった。さらに北へ 300 メートルほど離れたところにはこれまた図書館と同様の建築様式をとる立派なクリーブランド市役所があった。このクリーブランド市役所の 1 階左手には、クリーブランド市政図書館が納まっていた。

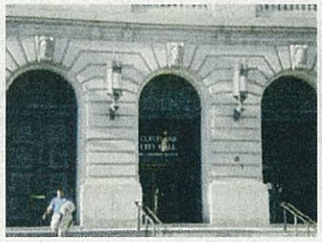
市役所の玄関を入ってすぐのところに警備員が 2 人座っていた。入所するために身分証明書（わたしの場合はパスポート）の提示を求められた。さらに入所時刻と向かう部屋の番号（市政図書館は 100 番）と氏名をノートに記入した。市役所は外観以上に内装が美しかった。1 階廊下の壁面に、殿堂入りを果たしたクリーブランド市民の写真が掲げられていた。わたしの知る顔と名前を探したところ 6 名を見出すことができた。前出の Brett、Eastman、Thwing や、シェラが勤めていた研究所の創設者であり、新聞会社の社長でもあった Edward Scripps の顔写真を見つめながら、いままで勉強してきた人物たちが生きた場所に自分が立

っていることに、不思議さとよろこびを覚えた。

市役所の一画を占めるこの市政図書館は、クリーブランド公共図書館のなかの 1 つという位置づけになっている。利用者用の端末のディスプレーにはクリーブランド公共図書館のウェブ OPAC が表示されていた。クリーブランドおよびその他の市政に関する資料が背の高い書架に並べられ、専門書も少量ではあるが配架されていた。市政図書館はクリーブランドで発行される新聞・雑誌すべてを収集しており、利用者に最新号の表紙を見せるようにして配架していた。

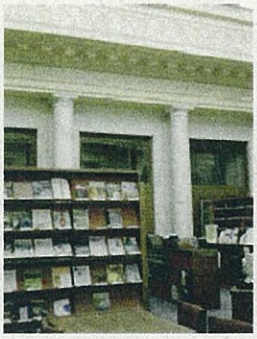
閉館間際であったせいか、わたしのほかに利用者は 1 人もいなかった。カウンターに座っていた図書館員の男性が親切に説明してくださった。ピンクのシャツを着たこの男性は見るからに賢そうで、威厳を放っていた。おそらく彼はライブラリアンだった。彼はわたしに「無事に帰ってくださいね」と言った。このことばはほかの場面でも何度か言われた。

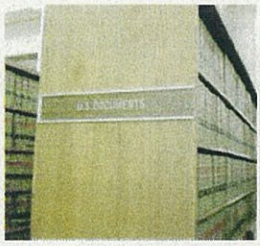
いわゆる市政図書館を見学したことはわたしにとって初めての体験だった。



クリーブランド市役所

クリーブランド市の殿堂





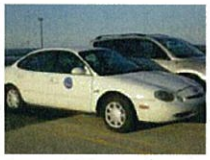
クリーブランド市政図書館

市役所の裏は市役所の駐車場になっていた。その目下には地下鉄のグリーン・ラインが走っており、さらにその先（北方）には、エリー湖が広がっていた。そこには比較的大きな遊覧船が停泊していた。西側には大きなスタジアムが見えた。スタジアムの横に大きな

立体の道があり、帰宅する車で渋滞しているのが分かった。夕日の強い日差しと煙突と海と大きな道の上で起こる車の渋滞という風景は、いかにも隆盛と衰退を経験した工業都市らしい様相を呈しているとわたしは思った。眺めのよい市役所の駐車場には公用車などたくさんの車が停まっていた。公用車はFORDだった。駐車場内を警備員が巡回していた。

クリーブランドの大学街およびダウンタウンの道路を走る夥しい数の自家用車を見ていると、TOYOTA、HONDAあるいはNISSANのホーム・マークが多いことに気づいた。なかでもTOYOTAは比較的多く、NISSANは絶対数として少なかった。TOYOTAと同じ程度の割合でFORDの車が走っていた。ホテルでテレビを観ていたときにも日本の自動車会社のCMが想像以上に多く流れたので驚いた。各社とも日本で流れているCMとは大分雰囲気が異なっていた。アメリカ人に受け入れられるようにCMが作られているためだろう。

市役所駐車場



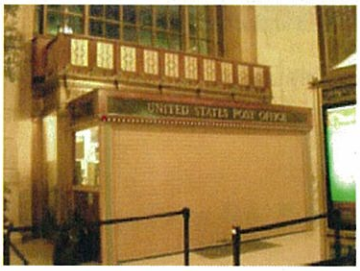
公用車はFORD

スタジアム

渋滞する道

市役所駐車場から見たエリー湖

遊覧船




荷物を発送した郵便局

Tower City Center 駅構内

**11月3日（土）**

平日の公共図書館と土曜日の公共図書館の違いを知るために3日もクリーブランド公共図書館を訪問した。前日2日金曜日の夕方よりも若干利用者の数は多かったと思う。

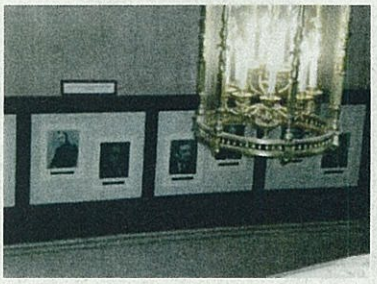
わたしは、「クリーブランド公共図書館の歴史について知りたい」と本館のメインカウンター（General Reference）にいた図書館員（おそらくライブラリアン。中年の白人女性）に頼んだ。彼女は奥の部屋から豪華なパンフレットを2つ持ってきてわたしにくれた。それ

から、わたしが向かうべき先（部門）を教えてくれた。わたしは彼女に言われたとおりに地下の連絡通路を通って、新館へ向かった。

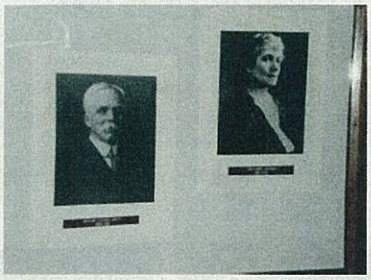
しかしこの後、わたしは散々盥回しにされることになった。結局クリーブランド公共図書館の歴史に関する未知の資料を見出すことはできなかった。しかし、盥回しにされたおかげで多くの図書館員と接することができた。

そもそもなぜ盥回しにされたかといえば、ある図書館員が自身の担当する部門に該当資料はないと判断し、他所の部門に目星をつけてわたしにそこを紹介する。わたしは言われたとおりに次の部門へ向かうが、そこでも同じことが繰り返された。最終的に行き着いた先にあったのは、筑波大学付属図書館図書館情報学図書館が所蔵している図書とアニュアル・レポート 2 冊のみであった。（わたしの英語表現に問題があった可能性は十分にある。それにクリーブランド公共図書館が抱えるアーカイブズは予約制だと言われたことからも、事前にコンタクトをとっておく必要があったと言われればそれはその通りである。）

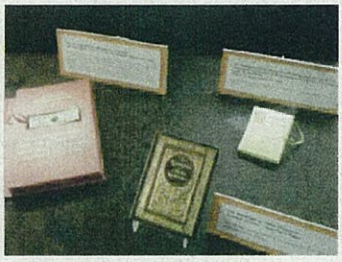
図書館員（おそらく出会ったひとの多くはライブラリアンではなかったように思う）たちは、みなそれなりに親切だった。威厳があって知的な雰囲気を漂わせていたという言い方もできなくはないが、どちらかというとツンツンとした感じだった。



本館階段踊り場　歴代館長の写真

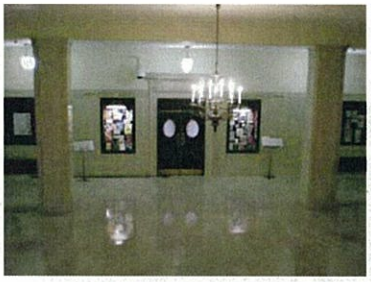


Brett と Eastman



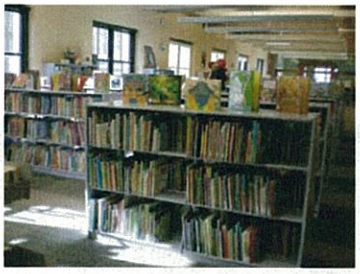
本館　宝物室

豆本



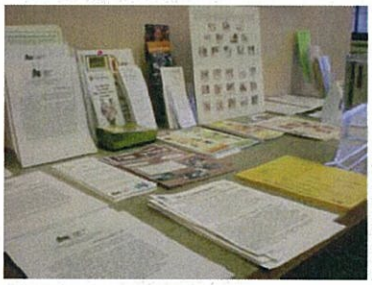
本館 廊下　　本館中庭に面する窓

本館2階より上はすべてこのようになっていた。



児童資料部門

金曜日も土曜日も子どもの数は多くはなかった。



パンフレットとリーフレット　　作業室

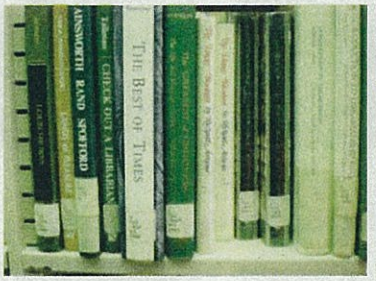
図書館が開催するイベントや勉強会を知らせるリーフレットがたくさん置かれていた。コンピュータ・クラスの月間カレンダーには初心者向けの内容から上級者向けの内容が載せられていた。

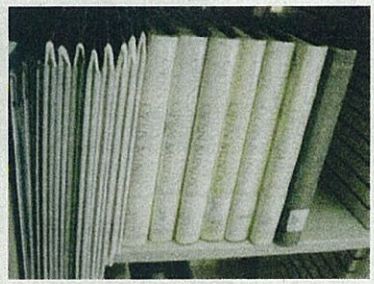
各部門のなかに作業室が設けられているようだったが、上の写真の作業室はそれらとは異なるようで、中の様子が窺がえないひときわ大きな部屋だった。

新館エレベータから見た書架　　展示　　歴史の書架

新館 2 階より上はすべてこのようになっていた。エレベータを降りてすぐに目に入る展示図書の並ぶ低書架およびその後ろの背の高い書架に配架されているのはすべて参考図書である。これら参考図書の種類と冊数の多さには本当に驚いた。利用者と職員が多くいたので撮影を控えたが、この左手にはガラス張りの部屋があり、貴重なコレクション等が置かれていた。右手には端末が 10 台程度設置されており、そこに利用者が集中していた。黒人の若者が多かった。金曜日も土曜日も全体的に利用者は多くはなかった。

新館のエレベータで一緒になった 2 人連れの男女の女性に抱きつかれた。理由は分からなかった。日本では考えられないことだった。



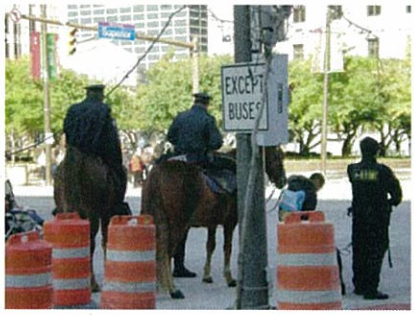


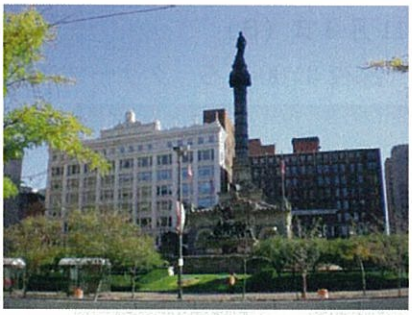
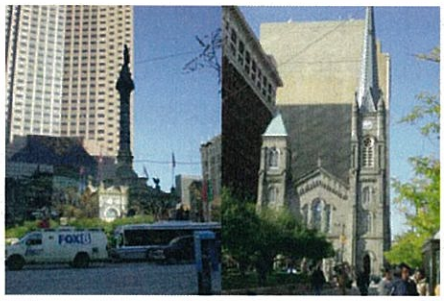
本館　図書館を主題とする資料の書架

これらの資料は中 2 階にあった。この部分の分類は議会図書館分類（LCC）であった。

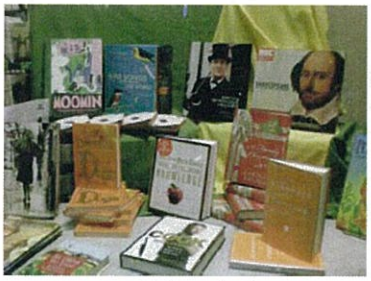
新館　1 階　通俗図書館　　ライブラリー・ショップ

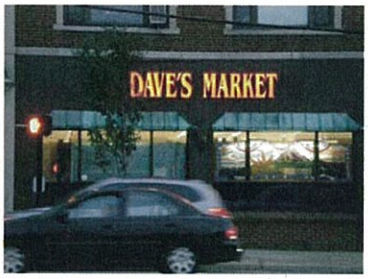
入場し易い雰囲気も手伝ってか、通俗図書館には利用者が比較的多く見られた。



ロックの街　クリーブランド






ホテル近くの書店（Border）　　毎日通ったスーパー

毎日通ったホテル近くのスーパーマーケットでは、商品（主に食べ物）のサイズや量に圧倒された。肉の塊や数リットルのジュースは魅力的ではなかったが、種類豊富なオリーブをプラスチックの容器に詰める作業は楽しかった。

高校生らしき黒人の女の子・男の子がレジ係をしていた。店の客の割合は黒人と白人が半々のようだった。あまり感じのいいスーパーマーケットではなかった。

**11月4日（日）**

深夜3:00ごろ　クリーブランド・ホプキンス国際空港に向かうためホテルを出発した。

親切だったタクシーの運転手さん

深夜に空港まで送ってくれたタクシーの運転手さんは、車中でわたしと話してくれた。わたしは、クリーブランド公共図書館について尋ねてみた。彼は、公共図書館自体にはそれほど興味・関心はないようだった。それにウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクールとクリーブランド公共図書館の歴史の研究と言われてもピンと来ないようであった。それでも、「自分の家の最寄りの分館はベストだ。とてもいい。」と言っていた。分館をよく利用し、とても満足しているようだった。

今回の研修では、時間と地理の問題から分館を見学することは断念せざるを得なかった。公共図書館の分館を見学することは関係者からも強く勧められたところである。今後の課題としたい。

6:00発のニューアーク行きコンチネンタル航空に乗った。早朝にも拘らず乗客は多かった。ひさしぶりに日本人の顔を見た。

ニューアーク空港で11:10発成田空港行きの便に乗り換えなければならなかった。ここで荷物の問題が起こった。わたしは困った顔をしてこれからどうするべきかを考えていた。そのとき、早朝の便で隣の席に座っていたアブラハムさんという中年の男性が事情を察してくれ、「自分も同じ状況だ。一緒に行こう」と声を掛けてくれた。アブラハムさんは空港職員に事情を話し、英語能力が不十分なわたしを助けてくれた。涙が出るほど有難かった。

成田行きの搭乗ゲートでは伊藤美幸さんにお世話になった。彼女は英語に堪能な若い女性で、クリーブランド・ホプキンス国際空港から成田まで同じ飛行機だった。見るからにひとの良さそうなひとだった。海外旅行に不慣れなわたしのつまらない問いに快く答えてくださった。有難かった。

行きは約11時間の飛行であったのに、帰りは約13時間の空の旅だった。非常に長かった。

18:00ごろ　つくばセンターに無事に到着した。